



和漢文操

行類
序類

翰類

三



5
2236
3



95
9238



和漢文操卷之二

○行類

△連他五照序

連二房



或おちしきと此お向と事とるに和漢文書
の遺跡ありてははるの所多く御の
まにりて楯の香花しうあると
今様よとて次方の新しうある
序かよとて新しうあるとて

和漢文操

を為のせとよまうて色持よけ春句とひよて

我れの上よけとたり

橘のうつりんやほくも

時をまへ色取もあはれ

かくてを為のせのけくけさとほくも橘を

よ本波の情とぬくもそと連歌之能諧と

よ相を時を此古歌とのよてそと能諧之

連歌といふ二章とまへおふむとかくて

まと言わの余情とそ連能とよ一虚字の

を照してかこよふ人を染持の先後とまへ

とを我くくと詞とす時をおよかひくもふりた

して短繁のうけよまへらとまへあふらひに

幸と暗記してはく凡新のばとありて

添越と詩やちうく新駿あり轡向の我朝

いそにりてはよて連平のり能諧あふらつれも

るの兼あふり兼よの染持のよひあひや

けゆへに連平をとまへとあふらひに能諧と

かこひまへも能諧と虚とちうて染持とあり

目とあふらひも染持の凡新のほくもあふら

ふ誠と先後とまへらあふらひに能諧とあり

くら懐きしの編書し誹諧之連歌しむき
 くの世し言篇の誹諧師のほ奥し連歌の
 どのり詞の誹諧しあくるし誹言連歌の言
 としはる編書しをぬんかや人々篇の誹諧
 へ儒しとまの誹文とやけ仰らと評家の
 能言とやして誹言のはらばをいふ
 いふ松陵の誹言とつふ歌とまゝありの誹
 とやふふありて又傷のまはし連歌の誹言
 のまあれ誹言し連歌ありて連歌し誹言
 あつらんや連歌の名と誹言のあつらん

洋ふかもの奥儀ありし古今集のよひに誹
 の号ありとやうも連歌のなること世の人
 かゝり誹言とをわぬ誹言の誹言は誹言
 誹言あれやまゝ誹言をいふやあつらん
 の里唐あつらんとはらと連歌のあつらん
 中名はし古今と誹言し言をよのりたれとあ
 あれ言下にまゝみよの誹言と誹言の
 るくくふらあれ誹言し誹言し誹言し
 るくく我が家の誹言し誹言の誹言し
 所白の誹言し誹言し誹言し誹言し

小名はとや用ゝて附合とあはれりて
 ともぬ時の用やいふや連音のまゝとくれば
 能活の形ときまらうてはしむるは其のまゝなり
 といふはたかたやともいふは連歌と能活と
 といふは和音のえ申ふことなりて世に中々
 といふ家もあつたなりとて附合のまゝなり
 連歌と能活とも或は能活と連音とも
 連歌と能活とも或は能活と連音とも
 といふは和音のえ申ふことなりて世に中々
 といふ家もあつたなりとて附合のまゝなり

のことばを面くのり懸りて大和の風物
 といふは和音のえ申ふことなりて世に中々
 といふ家もあつたなりとて附合のまゝなり
 連歌と能活とも或は能活と連音とも
 といふは和音のえ申ふことなりて世に中々
 といふ家もあつたなりとて附合のまゝなり

通おろし〜いよあめ神此ききあ〜い
けり此章と〜いりと得んを
年と〜にえ後のもも知れ〜て
そのいのみま此書と〜い〜
お膳と餅子と〜おとれ入
を〜るま〜し此族の〜い
便船と〜し〜へ〜り 風吹
小貝ひ〜み〜や〜汐の〜り
た〜と〜し〜れ〜り 又月お
〜枯〜し〜れ〜い此 高き

二珠由純二珠由純二珠由純二珠由純

時あ〜と〜吾に〜し〜し 秋のお
の森と〜し〜と〜ぬ親音の下
鳴かり〜し〜し〜し〜ん村あ〜を
お厨〜し〜せ〜し〜し〜し〜し
〜し〜し〜し〜し〜し〜し〜し
賢人のゆい〜し〜し〜し〜し
のまに〜し〜し〜し〜し〜し
酔のか減の〜し〜し〜し〜し
ま〜し〜し〜し〜し〜し〜し
鐘の〜し〜し〜し〜し〜し〜し

純由二珠由純二珠由純二珠由純

月に入朝の月影のあつたに
 ちいさなきいし歸る夜も
 随分のすん中へまて ぼく
 しみもあはれへんはれり
 塵よも帯もたもとに 抱あひ
 心やしあはれゆめ あらぬ
 めやりの暖き集とふれは
 じうーおしは馬代ゆき

純 由 珠 二 純 由 二 珠

○作者列傳

正致、枝木氏ニシテ伊勢ノ山田ニ師範トス連歌
 ハ里村家ニ通称セリトソニ壯年ヨリ家産

抱うス家法ハ建治ノ式目ニ據テカラ凡美ハ字祥ノ方角
 ニ遊ル一生不羈ノ隱逸人ナリ「光純ハ其内ノ高才ナリ
 博ク其内ノ詩書ニ通ス姓ハ木林氏ニシテ師儼ヲ家ト
 セリ東堂ハ今ノ俳名ナリトソ乙由ハ同ク山田ノ産ナ
 當時ニ俳諧ノ名匠ナリ昔ハ東老坊ニ宿席シテ
 新百韻ノ老ニ遊ル中ハ涼菴舟ニ鼓舞シテ足様ノ
 曲ヲ尽スニ集ハ俳諧ノ変ニシテ祖公羽成後ノ時世ヲ
 云々其後中川ノ家ヲ道テ今ハ木林ニ遊リトソ

△俳諧求韻序説

并短歌行

土方以立

眞儀抄云歌と韻字と用へざるあり之十一字

の歌と才と句の終字と和約と一才みの終字と
 終約と一約とつらももさくあふさをも歌とい
 又七歌之才と句の終字と和約と一才みの終字
 と二約と一かくのさく約とつらもも短き
 ちくさくと短歌といふ喜撰式かしく新撰髓
 古今集よくあけなると或云詩をりらこのたさ
 歌を我國の詞あり句をちありわらもあはれ
 いふらり一短歌ハ賦あり長歌ハ五言の詩
 旋頭等ハ江南の曲混本等ハ越調の詩連等
 へ聯句あり廻文ましくかくひくあふさあはれ

準句のたしとあふさあはれと也等短等也といはれ
 ありて奥儀抄よくあけなるとあはれは借と求
 韻の何れあふさ遠くと奥儀抄よも後とあは
 近くとあふさ又澄と假名のたしとあはれと也
 又や連歌の聯句あふさといふ能借しよの約字と
 といひて俳諧と連歌といふといふあはれとに
 柘梁臺の聯句あはれといふとくに酒折宮の連歌
 ありて漢武帝も日本武もけるの祖とあはれと
 其もく求韻の式同と奥儀抄も二行の約例
 ありて又句と系韻といふ言説と細韻といふと

麻韻とやまたまの音韻といひ細韻といひの
言葉とよはれり歌の束韻とて二行と新の尾不
ありて短歌といひ長歌といひ雙本といふ時
短歌一准とて絶句也

雙本

以六句為一絶才之句終字為初韻
才六句終字為終韻

あはれおのれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

短歌

以五句為一絶才之句終字為初韻
才五句終字為終韻

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

長歌

以四句為一絶才之句終字
為初韻轉々如此

あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ
あはれあはれあはれあはれあはれあはれ

これい初儀の韻則とありかに和歌といふ句ありて
二韻ありては初儀の韻則とありかに和歌といふ句ありて
君不聞のいふもへ和歌此ひさかあはれあはれ
のいふくはれは起詠とていひ終あはれあはれ
四句二韻といふもへ和歌此ひさかあはれあはれ

のるも換韻のさる句も同韻とあはれりて
 の論より用ひかゝるもあらずとも
 例として長篇のてふと勿論として歌行のれは換韻
 と用ひるに或は四句一換六句一換八句十句
 りりし粗ありて一奥儀のほろは法助ありてや
 今や和漢の例とすして和漢のまはれ初とす
 さる詩句の尾字と初韻とす一才二才は句
 ぬじ一とまれの句と韻とす六句は韻と韻と
 換じてさる時つ次のさる句は他韻とぬじてさる尾字
 とりて初とす一詩句の尾字と用ひるは

しかく漢家の律詩も我々の候初は臨
 とすよりのありて才さるの尾字と初韻とす
 一と句とすはありて一初と用ひるはや今や一巻の
 換韻は短歌行とするに初とす一歌仙行と六句は
 初とす一長歌行と八句五韻とす一はるは法
 六とすも六はもさる付一は篇六章の時ありて
 初とすゆりて換をさるにさるに百韻の時へ中間
 のすは句と八韻とあはれと假名の初す字
 りて句とすは不自然あるにさるは好す
 のは法とすは句一但を假名とす真名の韻例

あれ例より葉の韻とありて先仙陽唐の二韻
 とし用ゆへいむとゆくも求韻の訖るる中
 漢和の不自在ありて句うに韻字ありてや
 あんらと史記より他韻の事語と夫れを誤言
 微中の用といふも也尚もく韻の無細と倫
 といふ細韻を月も花どのいさく無韻の
 たりと此といさく或は佳利と妙録のれも
 他韻と并し音語からあれは又も同字の論と
 とくじりていり他漢の韻例も同韻も同字
 と用これへ今や他韻の韻式もかれとこれの

無細といふ同字別吟の例といふも余と不
 早ぬのさき右例の用於て是無とへ或は
 同韻と用ひてはさく二韻と論はるる也
 在と和漢の恒例ありて和歌の古はるる論
 うと我家の式といふもさく字保外ありて
 黃山老人の寫といふて莫の春といふ秋と此
 二といひて短歌行といふて歌仙行といふて後の人
 といひて酒色といふて惟時林鐘日澹江
 敬使壺峯白梅溪乙支榛栗主人方堅立筆操
 毫於觀世音寺之獅子窟暉云

求韻短歌行

良壺安年

香久山のこらにわすやちをたれ

さよのうら馬折

さかき

蓮二

うらとて霞くむておるよれを

方立

湯あそびくたにさるを

乙久

雲米を何そと余ふと守あり

二

さりのけし橋のあらし

峯

山の端北月まらくとまら

文

藤も秋ふく屍のうら

登

藤又故入秋とさいさるねを

峰

た官も又石つきくや

二

言をさる人のこらにわす

登

はあふふ船と海むを

文

大坂や中坂と波のま

二

ひりからふと君と

峰

此のおも猫めかひの

文

ちりた世のうら

登

くつたさる調やお脚

二

深おめるた

二

又抄卷之三

三

それとて此は様もねし月此は
 稽ふばしとて殿もあつらん
 かのりも宗うしつめをとあふて
 のちとけしきあふれり
 累ひとむにふし其の奥もあつらん
 連歌をと奪ふ ずのふらん
 二 文 二 文

○傳云は行へ連き之能消とやむむ若くは地鏡の
 佛割と描めものり一篇を合て姫舞の句は七
 五とて座の二句にさりて座のうらと手横されし
 中ゆららふ入座のありあける萩のうらと座の

一子とてはゆりしとてと錯綜して連歌の裁け
 と削てとてはしる表の言括とめりてれくと
 勢倒の絶妙と称もくはし今もく世天のまほ福
 とらねる季句のまの裁断あり方里のまのまの能消
 の束節とて此表と百世の温筋うんごの季句と
 此式の物結して我々の支配とてまのあつと幸
 二句まの頂しゆりて黄老人の所作はまのせい地と
 是かく表れあやまちと道じもやき連二のまのま
 ありむしと羽の羽まをまのまのまのまのまのま
 寄衣とて連能の古懐帯とあつとてまのまのまの
 中より宗祇を人のまのまのまのまのまのまのま
 ちるるや聖廟のまのまの宗祇の服ありけり而節の

又抄卷之三

三

名残しつり七句同じ事春と出でて老人も事句と
らしきものも本よむも了るは向のむとありき
思をいも倒よきうりて春向のそと再進まてま
敏捷の妻と我家の替身あつ連歌とせし連歌
と奪ふよふいされく今かく求韻の自在とゆふ
て中蔵の孔子もかくされあむ頓挫と能證の
そ地ふれい例の虚実とあせしと我減く此行此
大膽ちり評者も一掃とせしとあしとく例の事
を言も作者と越の石動イヌルキも位もつれし和漢の
惜まうて和事塞の例より喚て松子岩の之能
とよも地と又掃の選場とく慧く庵記よ
もいれありとめくこと記し互見をて

求韻歌仙行

け秋のるくくうもをまふか
赤瓦山よまきまのまむれ
持たはま月の園とちらけりて
猫殿あつるもも原の中
一歩のふゆと草司にねる命
むてふりおのそまよかき
ねの本此世のそいと持ちくうり
打らぬらまよぬらの子

川乙由

兔土
蓮二
表如
土由如
二如

蓬ふりけり 喉あけいけを 葦葎い
 染ふ 布中とある 南のつん
 嵐ふらふ 下ち海よ ちるいの 飛
 馬子よ 佐けのありい ちる
 ねこさた 比丘危とも 浦に 葎
 肉に 月い 月と ちも ちれ
 有印 せも 心の ちよ 一 而に
 むさ 坊よ 和活の 指あへ
 獲し ちれ ちる ち御ち 一 歌き
 ちの ちちら ちえ ち川 ちち

由二如由士如二士

葎形くつ ちと けち ち ち
 ちをよ ちち ちち ちち ちち
 起る ちち ちち ちち ちち
 ちの ちち ち ち ち ち
 耳よ ちち ちち ち ち ち
 便ち ちち ち ち ち ち
 ちせ ちせ ち ち ち ち
 牡丹よ ちち ちち ち ち ち
 入れの ち本と ちち ち ち ち
 ちち ちの ち ち ち ち

由二如由士如二士

好色七二字重字のきよの月
 子宿の香も思ふ代も秋の雨
 柳原の園てもかきとまなき
 花のうけ無書とてに狼藉あり
 七縦八横一言決の曲節とて

如二士由二如由士

○後云け行と能譜之連歌くふ一八八曲とて
 七縦八横一言決の曲節とて

題向とくく一當句の作人とかんがへり
 撰集の用あれし能譜も例の製晴あれし
 暮秋の如きときらわく行の一字入流の新と
 當句のゆりといふ所合のよもいふは其の端
 と求りて例も事話のかりと移と一作者
 ありしを如く結城申りて運二と同袍
 のうこと控ひて凡れ倍といひて忘るの

双六行 華夷人

けせとつらぬぬ 伏見 ころろ 早稲 の團入 空 せしあり
 折り垣のやめ老も 大和 ちちら 双六 ちちら
 人のほんと 空 さき 大和 したれ 双六 じはぬ
 そあや 大和 ちちら 双六 ちちら 双六 ちちら
 きのみ 小町 ゆね 空 と 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 のゆ 空 と 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 て 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空

四十 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 何作 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 七 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 七 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 八 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 四 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 四 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 馬堂原 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 四 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 三 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空
 三 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空 ちちら 空

きくちのしるひある。おのほやんまろく。きり又おの
むいふくをさあちりきり

○註言大和トハ双六ノ石立ナリ本双六ハ三所角ニ石ヲ五ツ立
置テ十五ノ石ノ早ク入ル方ヲ勝トス大和ハ敵陣ノ地ニ石
ニツ残シ其ニテ我陣ノ外五地ニ立テ敵ノ六先ヲ留メトシ
我陣ノ五地ヲ作シテ勝負ニ速速ノ遠アリトフ。鴨船ヤ田
中ノ石トあましむしにうれんむこれのゆを
ゆりきく源氏空蟬軒端萩ト其答ヲ打テ目兼ノ時
ノ詞とよひとあましむとたかくそよおあしあま
さぬいよのゆけくもきとくしあやうとあましあり

●長恨歌 梨花一枝春帶雨トハ美人ノ愁に染ラセリ

梨ト無トノ假訓ヲ称スシ。○空蟬卷ノ引号。いよのゆれ
ゆけくのぬを左ハツなと九ツ中と十六とら。按スニ此ニ
句ハ前ニ十年ノ響ヨリ四十ト余所トノ訓ヲ假シ此等
ヲ鎖詞ノ絶妙ト称スシ。○彼ゆ女のせいのまのむ此
まのすも一おのゆいもすれももも。按スニ此詞ハ難波
ノ遊女ヲ請出シテ今ノ依見ニ住セケン河竹ハ例ニ節ノ鎖
ナリ。▲明皇雜録皇典貴妃妹武將北惟重四可轉
上連呼号。骰子轉成四上悦賜。四緋云。重之重四ニ朱
字ヲ用ルハ此時ノ賜色トフ。按スニ其答以下ニ四所ノ重圍
ハ總テ長恨歌ノ裁入ナリ其下ニ見合スシ但シ草露ニ玉ト結
ヒテ魂魄不返愛ト云ル裁断ノ自由ヲ称スシ。△まのふトハ
和号ノ詞ナリまろくにまけきハ兩用ナリ。△馬鹿京ハ

揚貴妃方最期ノ地ナリ天竺遺事ニキクニ接スニカキ
 以下ハ總テ双六ノ相詞ナリ或ハ相手ノ手石多向ニカキ
 弟トハ宙早ナイト云フ者ナリ或ハ四仕^{シテ}と連上^{シテ}ハ四^ノ三^ノ
 手ノ多キ時ナリ或ハ三丁目ヲ指テ三ニ並下^{サナレ}ハ連波^{カキ}ニ免^レハ
 連波ノ拍子ヨリ出^ルハト返辞ニ廻言セタル文ノ起結ヲ称
 スキナリ ○西行歌ニ世の中と云フ者ナリ
 かりたやとらとちむもふふと接スニ此等ハ新古今ニ詞
 書アリテハ口ノ者ニ逢元時ノ贈答ノ歌ナリト云フ源氏ノ
 むねくさうらぬねのほやこたさのちのらねらとあり
 ○古今旋のそとありく笑の何のせとト讀ル是モ
 四六ノ相詞ナリ但此花ハ梅氏又次氏ニ説アト又貞ノ
 方ニ定ヘシト云

○源氏物語ハ此世行の面影ありと云フと揚貴妃ノ學
 處ト云セテ云々に長夜等の詞あり云々に一篇
 の大格と云々又ニ長歌舞あり云々と起結の形
 といふとて七々の幾路ノ轉換と云フと小説^{ウタ}淨^メ取
 の拍子と云あて今く此文の新格と稱を云
 或ハ篇中の此一句ノ催馬樂の例と云フて假名
 入直各字と附くると文章に鎖詞の常あり
 後文ノ訓と傳の例とある一ハ此世行の眞書
 一連波ノ瀬江のあやうらふらありてあかしの
 ぬやうらにけすと伝に云はるる者傳を傳
 たるちりり一々のあやうらと此行は云々一此の
 記念ノ拍子と云はるるのあやうらと云々

我名と例の華表人ふゆつらむとけりよる文鑑よ
万歳行のこもく遺稿よむれぬの文事よこむく物各
と題をりけり先解よ十各のそ一ある一

△大和聯句序 並歌仙行 渡白狂

詩歌者夫風雅之花而所謂詩變而為
騷騷變而為詞皆可歌鼻則詩與歌者
從音訓之違永詩了則曰作若永歌了
則曰訓歷總者道之優游而遊俗談笑
語共不忘意之風雅之謂也季左在則

其詩有聯句而其歌有連系事者從詩
歌之獨有面白麼我云人云聯其時之
意也則可弗諸越之人與大和之人為
物語詩歌矣耶物社月夜兮花且兮見
給侍人之心心而知召賢敷愚也鼻矣
貫之之詞麼為此意矣手抑鼻聯句之
始則或曰上則唐虞之賡歌下則漢武
之柏梁共或曰聯句古與此法自韓愈
孟郊始共或曰諸公已有聯句之詩謂
自韓愈始者非也共於茲思聯句之滋

鷓則如蘓瞻與蘓由之應對或者四言
 或者六言五言七言者勿論而厚言合
 上與下則漢曰聯句居和曰連歌歷古
 集之證文麼教多也左有厚纂為成一
 卷物者但可謂自韓孟始尔哉左有
 如園鷓納涼者連續一題之意而或者
 成百韻成五十韻言則謂兩吟之詩矣
 其後我朝如江心策彦者觀前起後而
 為似今之連能共譬則如以秋月對山
 堂以梅花對荊棘唯合十二門之名同

而物無體用之差別者字內義暗許之
 黑豆而謂詩歌無少情之論矣夫先師
 大音所遊洛之相國寺日有一聯之名
 對鳳兮桐倒掛章知客蝶也在周白龍子
 此一對者膾炙其世而稱倒掛與在周
 之意對止乎遺稿與書二倒掛八車坡詩三出厚以
 掛也故三各下在周八齊物論三霜八蝶也堂之在周
 也下云兀然在周八即對也
 例二右語入下八對八五山會合聯句二座字近
 解二右語入下八對八五山會合聯句二座字近
 從是江西南湖之向念遺聯句之名也
 與所白龍子與者先師之聯句名也其

後之祿之始也其在武江之邑蓋盧而
 素堂與故翁夜話之次撰之日月日記
 述往古評漢和之為不自在當時論聯
 句之為不吟味而其夜試有一聯之隔
 對唐土有芳野櫻將妬海棠山棠堂揚州
 無伏見桃被惡山薑白龍子
○唐和聯句之體
 聯句之故古今集之他諸歌ヲ摘テ唐土ノ芳野ト云ヘリ本
 ヲリ聯句ノ結構ハ和漢ノ兩用ヲ通スキ耳ニノ山薑本州
 二出テ白木ノ名ナリ揚州ノ產物ナリ抑李ヲ忌ム物ナリト
 然レハ和對ノ和スル所ハ唐揚州各ヨリ土州ノ地形ヲ對シ增シテ
 山海薑堂ノ一名ニ用テ附シタル也等ヲ意對トモ字對トモ是レテ
 定規ト只大和ニ聯句ニ對シトソ彼記ハ漢和ヲモ論談セリ

如斯者我家建詩聯句之一格而和漢

可通做各真名之用為也率哉謂大和
 聯句者其樣似鳳城之五言聯而全用
 我朝之俗談居其言學羅山之七字城
 而爾亦不為者也其意如何也則聯句
 者本出詩之變律而對其字其字之姿
 了共不運其題其題之情譬則如以牛
 對僧以松對鶴句對字對者不及言意
 對知聯句之作不作了哉然則月尔者
 有日星之體而花尔者有枝葉之用則
 俛如玉椿與系柳漢如山色與水光在

可以鳥之聲對梅之香了則金部隨觀
 而為附分重毛字某取可謂聯句之註
 用厚哉于然對十二行字耳則從乾
 坤時候之二行不及器賦食服之差別
 態藝虛複者似有各而無形而矣今也
 我家之所建者如句如字分姿情之品
 而逐一定附方之法譬則以古風對新
 月此類曰文字之姿矣字面者對日月
 了共古凡者凡俗而弗天象故也譬則
 以針鴈對團子此類曰文句之情矣字

面者全不對了共針鴈者言麥粉之撒
 入則也此外隨字行之輕重而不離姿
 情之二事者爰以郭公之一卷可知大
 和之凡例也初謂古聯句之法者不知
 為孰代誰人之提凡從五十韻至而韻
 然共今之聯句者長了則之數韻礎自
 有自己之變爰先者從二十四之短歌
 行用之十六之歌仙行而長其唯可限
 長歌行矣乎則五山之標式亦麼有
 歌仙聯之沙汰與所次謂去嫌之古式

者所謂地各人名氣植之類者部可隔
 二聯同字者量字行之輕重而可隔十
 句九句共不曉其法其式之道理則如
 童部之習心經歌覺無的果今止將為
 大和之聯句亦者衣不替連佛之式分
 四折八面之表裏而可效四花八月之
 法式矣乎此故今之歌仙亦者以始中
 終成折附止矣四十四麼五十韻麼效
 此例些爾有則曰連歌之漫和居回能
 諧之和漫共式者可任其產之宗近厚

或乍去推行回華對類初乎土麼偏冬
 僧麼為著述而知平反事者殆無所越
 聯句物唯從東冬至咸嚴法知平色
 之韻字則上去入之之韻者有我不知
 而知之理果亦有人者不及姿情之塩
 梅優尋城南了倭櫻城西了效韓孟以
 策之達者而觀儒書了助佛經了混尚
 覺功々之故事古語些知和訓漫音之
 可假用身於典松待之記要則縱夫謂
 學向之果敢遣矣斯而知其學之用與

通用了則知詩歌有今日之優游知聯
句有姿情之品而誠被謂和後之文人
矣然則聯句之厚用也識論語之所謂
蒼皇之名而謂為學文之始終矣夫

聯句歌仙行

郭公松獨立芋頭雙
橋落雉離卦
王炊新月芋
始靈一驚山雀橋尼子
杜若鶴雙橋尼子
家榮調肺藏
筆掘古風畫
思之隱伏蟻芋頭雙

沽諸茶宇袴
園寺鷄無傷
顧身浮竹佗
衛士待油賣
平家花將敵
中
彼岸錢團子芋頭雙
身負常嚼老
題騾源之位
捧文梅早咲
娘鑑照親園
痛也木綿裏
桂川猿有整
俄渡淺茅荒
代官停米商
秋中蝶先尊
節供化蚌腸橋尼子
口滑頓為倡
式師又五郎
先業竹初株
世衣韜武光

鳥藏三日月

鵲渡二星霜

鐘面白蘆穗橘尾子

盃十盃菊香平頭雙

句宮諸第様

虎殿惜鉈坊

日本治花幕

春初調柳相

註曰▲發端ノ聯ハ全ク大和ノ新格ニテ郭ニハ和歌ノ情ヲ結
 杜若ハ俳諧ノ次ヲ示スニ様ハ凡雅ノ本懐ト云ハ本ナリ漢家ノ
 別ヲ見ルニ生類ト植物ノ對ハ文法詩格ノ常ナルヲ何トテ中古ノ
 聯句ヨリ古人ノ法格ヲ失ケ然レ今ノ秘スル所ハ郭ニハ松ニ
 杜若ノ鶴ト當季ノ花鳥ヲ錯綜シテ郭杜公若ノ字意
 ヲ配リ独ニ離々ノ數量ヲ合セタルニ是レハ多ニ效トナリ

▲此聯ハ謎文ナリ離ハ板橋ノ中断ニ喩ハ肺ハ五臟ノ金ヲ貯フ

離ハ肺金ハ五行ノ意對ニシテ臟ト藏トハ通用ナカラ

卦字ニ奇絶ノ對トスハ例ノ韻ハ杜若ニ橋ノ一字ヲ

寄セテ卦名ニ假橋ノ次ヲ見キナリ

▲此聯ハ假對ナラハ以月ニ大和ノ働ヲ秘スレ然レ古風ノ量

トハ論語ノ詞ニ安ラ認タル儒者ノ養生ヲ失ルナリ堀ノ

一字ハ筆耕ノ語勢ヨリ當季ニ句作ノ働ト云ク炊堀ノ

▲此聯ハ俳諧ニシテ秘スル所ハ一ト山沢トノ字對ノ配ヲ見ル

ナキナリ論語ニ孔子文子之思ト云ルヨリ句情ハ無道

ノ世ヲ隱シテ鑿ノ如ク穴居ストソ邦與道則隱ト云ル

字毎ノ裁入ヲ秘スレ韻ハ机右ノ山雀ノ意ナリ

▲此聯ハ古語ノ裁入ナリ論語ニ求善賈而沽諸トアリ
 對ハ小町カ伊ナリ幸都學レ町ニ痛リヤ小町カ此レ
 一ハ優女トクトアリテ首ニ裏ヲ掛スル上食ノ様ツ云リ
 然レ對ノ稱スル前ハ茶ノ字ト木綿トノ絡談ヲ用得テ觀ハ
 但シヤキ人躰ト見ルヘシ

▲此聯ハ一巻ノ奇絶ト云シ鶴傳ニ古歌ヲ擔ヒ猿致至ニ古
 詩ヲ採ル増テ桂川ノ用ヲ評セハ歌仙ハ例ノ二花二月ナラ
 或ハ見渡ニ月ヲ含ス桂ノ餘情ヲ稱スレ去ハ名町ト云イ
 人名ト云ト偏旁ニ毛對心得アリテ蘭ト桂トハ終ニ主ヲ
 對シ寺ト川トハ其名ノ高ナリ譬ハ蘭寺ニ暖城ト對セシ
 ハ中古ノ麻字ト云キニヤ觀ハ小町ニ逢坂ノ蘭ナリ

▲此聯ハ連歌ノ漢和ト云ハシニ句立ニ詩歌ノ詞ヲ攝テ
 觀ハ人望ノ限ナキ觀相ナリ此等ヲ聯句ノ地ト知ヘシ

▲此聯ハ俳諧ニテ衛士ノ由賣ヲ待夏ハ四式モ裏テ白玉居
 ノ京流行様ヲ云ル例ニ前句ノ觀ナカラ待ノ字ニ作者
 稱スレ本ヨリ衛士ト代官トハ官職ノ品ナカラ字意ノ配ヲ
 稱スレ由ト米トノ附合ハ俳諧ノ笑言ヲ稱スヘケン但シ
 御幸貢ノ前ニ米ノ賣買停止ノ制札代官前ノ定法
 此聯ハ一轉ニテ是ヨリ二折ノ曲節ヲ尽シ厚ナリ平家ニ叙

▲此聯ハ一轉ニテ是ヨリ二折ノ曲節ヲ尽シ厚ナリ平家ニ叙
 申ハ中族ノ意對ニテ花蝶ハ例ノ大和以ナリ去ハ佛ノ幼徒
 ラ證シテ譬ハ蝶ノ花香ヲ掌ルカ如ク衆生ハ其徒ニ由ヘトモ
 曾テ其跡ヲ見スト云ル遺教ノ意ヲ攝スルナリ但シ代官ノ觀
 ニ平家ノ裏ヘテ附スルハ家語ニ奇政ノ詼詞ト知ヘシ
 ▲此聯ハ一成ノ俳諧ニテ仏前ノ供物ニ由ラ置スル彼岸ノ

殊勝ヲ崩セルナリ拜ノ字ニ作者ヲ着破スレシ彼岸ト即供
ト八時候ノ對ナカラ多ニ團子ヲ彼岸ト云ク第^{十一}卷^ノ即供
ト云ハシカ如レ然ルニ團子ト鮮腸トハ此類ヲ指テ各字對
ト云フ去ハ温飢粉ヲ撮入テ鮮ノ拔身ニ似タリヨリ其名
ヲ鮮腸計ト云ル上之脂ノ詞トハ化ストハ雀化^スト云ル
月令ノ詞ヲ假リテ糝ノ枯^{カラ}回^ヒスルヲ雜^カ煮^クニスル莫モ独法所ノ
七鍋^ノ立^テラシ^テ觀^テハ例ノ教^ナカラ^シ蟬^ニ似^テ前ノ錦^ヲ見^レシ
此聯ハ前ノ合^ノ負^キホ^テ觀^テ此^ノ躰^ヲ削^リ地^ト知^レシ^ノ嚙^ム老^ト和^歌
ノ詞ヲ摘^シス^ニ爲^シ倡^トハ滑稽^ノ辨^利ナリ然レハ此^ノ地^ハ曲^ノ節^ノ
會^ノ歌^ニシ^テ一^折ノ向^ニ二^兩所^モ有^レシ
此聯ハ滑稽^ノ觀^ナカラ^シ一^卷ノ曲^ハ即^チヤ^云ハ^シ或^ハ日^ノ啟^上ノ
戲^ニ係^レ位^ヲ勝^シト^テハ^今治^リ後^ノ鞭^ハ火^桶頼^政ト^云ル

四品ノ題ヲ入テ一首ニ讀^キヤノ仰^テ此^ノ家^リナ^リ今^ノ治^リノ
所^ノのぬら^くおほ^はる^は氷^ノ魚^ノけ^きい^ふふ^らう^らや^まら
ら^しト取^アス讀^メリ^トワ^レれ^ル竹^ノた^ら尾^ノ殿^ハ追^ノ測^ノ
便^式と^るる^は衛^士の又^ハ部^ト解^スる^はあ^らま^らし^と也
此等^ノラ^シ字^對ノ奇^絶ト稱^スレシ
此聯ハ竹^ノ葉^ノ詞^{ヨリ}花^ノ枝^ニ文^ヲ附^ルハ全^ク林^ノ庭^ノ觀^ニ
ナリ然^レニ^ハ文^ノ素^ノ格^ハ文^ノ彩^ニ色^字ノ假^對ナ^ラ柘^地
ノ素^練ヲ伊^レテ意^對ノ備^ヲ稱^スキヤ先^素ノ^ニ字^ハ
周^禮ノ詞^ヲ轉^ス論^語ノ朱^註ニ見^レ合^スレシ
此聯ハ全^ク俳^諧ニ^シテ^ハ極^ニ鑑^ニ世^衣ノ附^合ハ^シ字^對ノ中^ノ
意^對ト^ヤ云^ハシカ^ハ觀^ニ鑑^ノ一^字ヲ^寓テ^ハ親^屬古^歌
ノ裁^入ナ^リ親^屬光^ノ輕^重ヨリ^照韜^ノ字^對ヲ^稱ス^レシ

▲此聯ハ和侯ヲ錯綜シテ別三格ノ備アリト云ハシ史記列傳
 五車ノ良ヲ蔵トハ韓信カ武功ヲ評シタレハ月ニハ
 前ノ老字ヲ顧テ聯句ニ附心ノ奇絶ト云シ増テヤ古語
 ラ翻轉シテ鳥ノ蔵ルトハ夕昏ノ會釈ナリ物ヲ故友
 ラ株リ古語ヲ摘ム夏ハ此節ニ效キナリ 鶻ノ相ハ古歌ノ
 蔵入ナリ但シ之曰ニ二星ノ如キ 音訓ノ附合モ亦有レシ
 強テ二星ト和訓スヤラス日星ハ例ノ假對ナレハナリ
 ▲此聯ハ句作ノ奇絶ト云シ晨鐘ニ而ハノハヲ殘シテ東白ノ
 様ヲ云ルヤシ穩ハ橋ノ顧ナリ増テ其對ナキヤハ時深
 切ヲ以テ平音ト成セル此等ヲ聯句ノ文覺ト答ロシ但シ
 是花不^カ盡^カ香ト云ル古詩ノ詞ヲ轉シヤカラ白^ク尽^ク四ノニ
 ニ是^レ教ノ節ヲ稱スレ

▲此聯ハ名殘ノ曲節ニテ顧ハ節所ノ遊宴ナリ中ニ好色ノ徒
 人ヲ第トキヤ某鐘ト云ルハ歌舞ノ地ノ風事ナリ源中ニ
 句宮ナラハ様字ニ俳倡ヲ尽セリト云シ院殿類聚ナリ宮
 殿トノ字對ヲ稱スレ運生坊ノ鮫ノ夏ハ^カ向^カ答^カ要^カ見^カ
 ▲此聯ハ録倉ヲ顧テ當時ニ夫平ノ結文ナリ柳箱ハ礼器ナ
 重トキト吉凶ノ沙汰アリ然レニ此對ヲ穿鑿セハ柳箱ハ
 折節箱ニテ依主ト自業トノ釈文ニ據ラハ花^カ箱^カニ對ス
 へク花^カ幕^カニ對セキト秋^カノ^カ排^カ式^カニ月^カ花^カノ^カ句^カハ指^カ于^カ沈^カ吟^カ
 セス一座ノ首尾ヲ先トスレ然レハ拳句ハ勿論ニテ其日
 其時ノ用ヲ知テ法ニ泥ヌラ時宜ト云ハ^カ夏^カニ^カ俳^カ諧^カノ^カ法^カナ
 ラ知ラハ風雅ハ今日ノ優游ナルヲ知レトフ
 源云レ一^カ弄^カト^カ芝^カ竹^カノ^カ風^カナ^カ運^カテ^カ其^カ形^カノ^カ美^カ也^カ也^カ也^カ

けしめは様へ大ね聯句の温ふれど灯を語義の聯句
とらくらへ幸句いふおほくも詞を揃ちりけあま
折こころを幸句と對句こゝに入替れり草類雙と
蓮二の聯句各よして櫛尾子とく白ねる幸連をせよと
て雙の事おふれいそ作を居れよ居のるといふは
櫛の子とたつれいし狐し櫛尾をれ通縁ある
汁を居るなり聯句よ各ありいふとくさる聯といふ
そんて傳ふとる雙刻をま曲へ文繼の傳類よ
るる一

○聯類

大小聯 並序

藤巴雀

聯といへば行傍りてかあもてたをたれよと
と趙索の比れ地おきり横よたうりと總い
いふよもそと聯といひて仰南神話の居殿と
あ一野店山花の以信とふたりも中とて種書
一對ふは文の一聯とて極よえりてたをの極よ
あしゆりて聯といふあちり一はれ今毎二牧
よかきとて一牧の極よ一聯の法あんも一と一
てみ字七字あんとて句を聯といふさうと
月次の大小と極の長と表とん後とてれと大小
といふあくの書面よけさうといふあめ時れを

つらつとて予が以て凡雅の地を弄とて少くも業を
題の二子ありとあるく大小の類此二子あるんを
たうし摩訶と阿佉との梵語と云ふも下二胡物
とりても幸の大小と和して後とて一方は
はらりて神子聯とてあきらまりしとて又豫の
選場はゆかりに又選の連珠も又格よくゆかれされ
標題よあげえたりとて又大小吟とてゆかり
聯類とてゆかりとて又某の操とてゆかりとて和漢
新格の常用と稱して又番舎のあやう
なりとてゆかりとて

摩訶

兼此也

阿佉

若菜摘宛表于葛
八十年老亦待春

○得ては聯の序い簡古なる朝に能く語めをた地ありと
移して一減し業を食の二字題を杜律見題文とて
とて得てはしほしと人の死やあたるふのそけりて
麻とのそまき本と血とのたふれあんの世あり
のそりありて一商家の存懐とゆかりありて
大やの二子との命を楚語のそりありてあやう
凡雅のそりありて世に有用の所ありて

上文章の優海とある一清連珠とを思慕の一
名七格と文選の陸士衡の文とある一今の名
武藤氏あり一尾の城下はもと一春田舎を
ふるふあり

園口聯

おとと唐 ちかちか ありおん 芭蕉老人

○評ふは唐のちかちか 唐のちかちか ちかちか
芭蕉庵のちかちか ちかちか 唐のちかちか ちかちか
唐のちかちか ちかちか ちかちか ちかちか
ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか

堪忍聯

字訓詩

張昇角

おらふと馬しゆれ ちかちか ちかちか
ちかちか ちかちか ちかちか ちかちか
○評ふは詩の字訓の格とある一ことと起語とあり二
と起語とあり起るの語あり一いけちかちか
大和の新格とあり一作者は文選序と各録あり

鑑亭聯

東花坊

山とをくらねむと云ふ中ちかちか

水と近きな月とらへてはま

郭公のお

時雨の月

そん程まであるらむ

いふと中へ入るにあら

そん程まで

糸いもつてはげん

やうらむ

○傳ふ程までと程の新海よりなりて北七里ふかき
ありきりにて時雨のまほろばとて枝もえりて静
ちとらりと東濃の野航よりして柳雪をさかすはる
あつては静のせよ二枚ありて石世のま論とらむ
かんこころにそふとほつてはるものせ

五字聯

いふと中へ 孫をくへ 睡る心

猪のちんぐれ

ふと坊

○傳ふ程と傳中の念をいふりて未秋年の葉解り掛
きりけりては神の在子と傳ふういふのあきと
祥はの南をありていふりて誤解とれ今うの五字
ひうて一枚の聯とちりてあつては神の序を後
みして遠道の子傳と打殺してはるい聯の
十郎のうてはるを公頭の名

とらせ侍て我の居降らりまをと。おろしけゆふい大作
のたとしてらーんの堅固ちる色と。あーはりのやうに
上人のあくと盛よりも降きして心とこがさるはたらく
せしゆのたらよやゆくもせめちりの底よる山れ
ららるるも孫うらまゆとやまゆしきりまゆり蓮
のふのちをくらりも海ふむたよまゆたゆつらぬ
とるらりる

○註曰○又選^ニ越^ニ身^ニ業^ニ南^ニ枝^ニ胡^ニ摩^ニ斯^ニ北^ニ風^ニま^ニ世^ニ意^ニ故^ニ郷^ニ
ヲ^ニ思^ニフ^ニ夏^ニナ^ニリ^ニト^ニフ^ニ△^ニ身^ニカ^ニ鳴^ニ玉^ニ鐘^ニモ^ニ東^ニト^ニ都^ニト^ニ枕^ニ詞^ニナ^ニリ
枕^ニ詞^ニノ^ニ夏^ニハ^ニ道^ニ理^ニ有^ニ無^ニヲ^ニ論^ニス^ニカ^ニラ^ニス^ニ故^ニ矣^ニト^ニ世^ニ類^ニナ^ニリ^ニト^ニ

○潘^ニ岳^ニ所^ニ著^ニの^ニ中^ニと^ニ似^ニく^ニま^ニと^ニ人^ニお^ニち^ニげ^ニま^ニり
あ^ニの^ニあ^ニの^ニま^ニゆ^ニ△^ニ水^ニ相^ニ觀^ニ八^ニ觀^ニ經^ニニ^ニ之^ニ觀^ニノ^ニチ^ニリ^ニ月^ニ光^ニ
臺^ニ子^ニノ^ニ故^ニ矣^ニナ^ニリ^ニ細^ニ拳^ニノ^ニ反^ニス^ニ△^ニ高^ニ僧^ニ傳^ニ惠^ニ遠^ニ法^ニ所^ニ勉^ニ
六^ニ時^ニ孔^ニ誨^ニ云^ニ其^ニ後^ニニ^ニ善^ニ導^ニ大^ニ師^ニ孔^ニ誨^ニノ^ニ得^ニヲ^ニ僅^ニホ^ニノ^ニ給^ニ介^ニ
ト^ニフ^ニ△^ニ阿^ニ房^ニ陀^ニ經^ニ七^ニ重^ニ行^ニ樹^ニ皆^ニ是^ニ四^ニ空^ニ云^ニ同^ニ經^ニ有^ニ七^ニ室^ニ他
八^ニ印^ニ傳^ニ水^ニ云^ニ△^ニ無^ニ量^ニ壽^ニ經^ニ隨^ニ應^ニ而^ニ現^ニ云^ニ同^ニ經^ニ而^ニ味^ニ飲^ニ食
自^ニ然^ニ盈^ニ滿^ニ云^ニ○^ニ玉^ニ樹^ニ司^ニ其^ニ平^ニ云^ニ足^ニ安^ニ山^ニト^ニ云^ニ凡^ニ
例^ニニ^ニ和^ニ歌^ニノ^ニ枕^ニ詞^ニナ^ニリ^ニ△^ニ荀^ニ子^ニ學^ニ不^ニ可^ニ已^ニ青^ニ出^ニ於^ニ藍^ニ而
青^ニ於^ニ藍^ニ水^ニ出^ニ於^ニ水^ニ而^ニ寒^ニ於^ニ水^ニ
○^ニ浮^ニ云^ニは^ニま^ニと^ニか^ニの^ニ名^ニの^ニ自^ニ子^ニ云^ニ湖^ニ南^ニの^ニ百^ニ名^ニ歌^ニノ^ニ秘
名^ニと^ニり^ニれ^ニお^ニく^ニち^ニい^ニて^ニよ^ニま^ニか^ニま^ニさ^ニり^ニあ^ニれ^ニを
け^ニ序^ニの^ニ文^ニ勢^ニと^ニ傳^ニと^ニん^ニあ^ニる^ニら^ニに^ニ和^ニ奇^ニの^ニぬ^ニら^ニと^ニ求

了ら梅枝よもといふよありてハ川村よあふふ
以ら宵半人よあそそ〜が夜半村の時ハ大石よあそ〜
皆ぞし天のおとあゆ〜て貴族金福とくめら〜
ち〜ち〜ち〜

○註曰△逍遥遊ノ二字ハ莊子ノ篇名ナリ逸註遊者心自天
遊也△梅スルニ此序ハ車濃ノ書文ヲ羽集ニ在ナリ
ヲ假テ四季ノ狩ヲ方ニ其ニ望ムノ序詞ナリ羽集上ハ羽集註
ノ意ヲ運ヘリトフ○詩經ニ鳥飛ノ辰天ニ魚躍ノ例△山仙傳
丁固字仙術也白鶴也△仙祖經紀ニ觀音ノ美女ト化
シテ馬郎婦ト成玉ヲ食アリ例ノ十九應身ナリ

○漢云△序ハ今ク莊子ノ文也〜て子本も歎め居

一富き遊の一字と形容と〜丁固ノ親者との例
心〜の〜と莊子ノ文也〜て子本も歎め居
況や心身の道遠し貴族金福の親おとまねと遊人
の世もホとホと〜し〜例の孤諫とま〜て例ノ第中
の刀と心〜〜一樸者と文鑑ノ姓名ありてか〜て
祖又〜〜〜子ノ親を〜〜〜事保の〜
あ〜〜〜て道ノ断続の歎と〜〜

二見文基繪序

張昇南

五〜けニ〜の浦といせの園此もあやとれと〜むの
而〜字〜〜と名〜〜流連と〜〜た〜〜

とかまゝと西より人の呼吸とまゝとて我々のるの如
 ありきありとせむとていふより又玉の付極より極極とて
 のまゝとていふより又玉の付極より極極とていふより
 漁人の月とていふとていふとていふとていふとていふと
 い御前のありのまゝとていふとていふとていふとていふと
 廻極とていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 ていふとていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 く御前のありのまゝとていふとていふとていふとていふと
 い御前のありのまゝとていふとていふとていふとていふと
 せむとていふとていふとていふとていふとていふとていふと

梅のありのまゝとていふとていふとていふとていふとていふと
 もいふとていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 ありとていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 はいふとていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 らもいふとていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 もいふとていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 氣約とていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 ありとていふとていふとていふとていふとていふとていふと
 天下のありのまゝとていふとていふとていふとていふとていふと

○註の西よりとていふとていふとていふとていふとていふと

〇西行上人の住玉所ハ二見ノ西味ト云フ里ニ
山名ニ相ツ散テ文基トセシ其跡ハ今ニ在リトフ〇十論ニ能信
ト云信のほあり世法の入和と云論の常は〜トあり
まゝ能信のろくろつ〜トあり〜トあり信の解と云〜トあり
とれ〜△論語ニ繪事ニ後素ヲ云ニ按スルニ此ニ文字結前生後
ノ常ナカラ世等ニ文章ノ新續ヲ知レシ△海松ニ給ハ硯箱
ノ繪ナリ然レテ兩用ニ書スルハ五老并作ナリトフ硯箱ニ書スル
柳ニ在リ文墨圖ノ下ニ見レシ〇松梅ノ證文トハ裏書ニ後句
ニ二〇ん〜ト松のあり上梅の月トあり〜ト按スルニ世裏書ニ落
ノ抑後園ヲ始ナリト云テ五老并ノ云レテ圖ハ松朝日ヲ昏ク
ヘテト縁色ナラ子ハ紛ハレニ見レシ松ハ論カフメ梅ニ腫月ノ圖モ
アリテ故公羽ノ筆跡ナレトテ其後ハ梅ナリモ昏レトフ

〇唐詩ノ言解、音、ゆりく〜ト云フもやち〜ト云フのかさ〜ト云
か〜ト云フの非のあ〜ト云フ〜ト云フ知多ハ尾張ノ一郡ニテ方歲
ノ出所ナリ按スルニ世ニ對ハレテ何ノ要ナレト云テ若ト弱トノ不形
ヲ云ナラフ爰ニ世序ノ辞宜ヲ調ヘ〜ト云フ世文ノ証語ヲ云セシ
字對句對ノ例ノ三〇ニス文ニ意對ノ絶妙ト稱スレシ重祿廣記
繪ノ法格アリ氣韻生動ハ六法ノ才ニノる老而簡ハ八格
ノ才ナリ細筆スレニ暇アラヌ△白馬ノ文章訓ニ能讀ノ文章ハ
無用ノ用アリテ合書訴快ハ有用ノ用アリト云フ按スルニ詞
ハ文字ノ人ノ學言ヲ文章ノ意地ハ世間ニ知キナリ
〇漢云は〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ
と云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ
中段の次身と云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ〜ト云フ

ほも張とせしめて土佐氏あり先八仙撰者なり
てそつゝ八仙觀と稱し和漢多經の傳人あり

百物語序

岩司龜

此を七月のあまふらりし。きまの尾北おきちるに例
のむきもあまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。

いみ田川のおきと稱しあまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。
あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。

○註曰○赤人等、あまふらりし。あまふらりし。あまふらりし。

く一後とひらりしもきほし△幸長茶と石下八祖の歌言
 ナリ十論法式下ニ出タリ △殿村、田畠史ニ金毛九尾の野狐
 アリテ姐已ト化してテ國を氷ヲ乱セリト細奉ニ及ハス△古今集
 序、秋の中ハ秋田川ニありありおそき事、事のはげしき路と
 んたつひ△是のあしとよりゆきのゆくと人たつとてそつ
 とのこゝろおしひゆきあり △鳥玉ハ後ト云く團ト云く枕詞ナリ
 去ルツ眉墨ノ詞ニ寄セズ俳諧ノ微中ヲ称スレ世等ハ句對ニ
 似ズ凡是ツ文對ト知テナリ △芋頭ヲ轉ト成レ芋頭ヲ
 掌ト成セルハ中古ノ檀林嘯ニ在リ物語ノ二子ノ起結ナリ
 △嘯竹ト百題ノ用ナカラ嘯ノ字ヲ夜寒ノ物結ト成セル
 文ノ新讀ヲ見ヘキナリ
 ○漢云はたすはど号号のそくむに一冊の授けのり地

るるこくと集くととまあつていひ能階くとこつ
 子ナリトていひ能の終より下ハ九尾ト七尾の詞の宮
 くり四子子の化ゆのちりくはひまはまに能階
 の瓦物語として一作者と岩城中として能やしの
 七尾ト伝はして者末子ハ仲と抄多しと或は一里橋
 として中ちとと一課の能將として一

愛三百合序 並詩

東乙文

我南水陸州木之花者徒梅也櫻之咲日
 信藤山吹之春而愛牡丹則思芍药居愛

菊則思水仙歷在有名如董大將之所慕
 手習之君愛情者不忘其面影則也于然
 牡丹者被生達魏姚之家而盛李唐之間
 也則房子之障子厥日居薛繪之筆司儼
 露而玉妃麼覆湯上之面許殆不耻千金
 之價東徒是以通我朝止乎元祿之後者
 被麗而菊之名而牡丹者如有而無也至
 增而不染世之得蓮花之有仰嗅者
 愛情者削之可識厚哉友在則所我鄉之
 襟菓子者離蓮幽氣之古風而園植色々

之百合而且培了久誰了不作十二一重
 之襟矣共紅白自有品而如頭插了如居
 眼了隨風而有厚彼地等向了者徒本謂
 以花之愛相矣爾有則捲公之所好者和
 漢尋他教奇之色而彼方慕卓文君之前
 室居城方壽未摘花之假看要友有者新
 請年月厚經了共露不忘給弗其人之本
 情厚耶但有效或法師之物教奇而可謂
 玉色之有色隱者矣乎
 百合不誇蘭菊名自斬心芽菜似傾城

くらり捧ふのひはうらうらとほろりしうらうら
 ころりと虚室の澄みしうらうらとほろりしうらうら
 くらり作るを越のるはうらうらとほろりしうらうら
 くらりつらむ梅溪と梅号とつ記るをの博士と
 くらり東歌亭下入るらんをうらうらとほろりしうらうら

くらり捧ふのひはうらうらとほろりしうらうら
 ころりと虚室の澄みしうらうらとほろりしうらうら
 くらり作るを越のるはうらうらとほろりしうらうら
 くらりつらむ梅溪と梅号とつ記るをの博士と
 くらり東歌亭下入るらんをうらうらとほろりしうらうら

久保巻くく之終

